

古いものを大切にすることについて

karinomaki

古いものを大切にすることについて

新しいものを買うことは、心にさわやかな風を吹き込み、生活の喜びをもたらします。しかし、その暮らしの中で、忘れないほうが良いことがあります。ずっと持っていて、苦楽を共にした、思い出のアイテムを、大切に継続することです。

カントの哲学も、「古い」と評されることもあるそうです。しかし、本当にいいものは、例え古くても、不朽のものです。古くてもいいものを大切にしつつ、新しいものを買っていくことが、本当に人生を豊かにします。

心が豊かであることは、物が豊かであふれていること以上に大切なことです。私は最近、ある大切な人に、本当にいいものを持って大切に継続することの意味を教わりました。たくさんの物を安く買うよりも、少し高くてもいいものを少し買うと、安いものよりもずっと長持ちするのだと。大切なものを長く持つということが、本当の心の豊かさを作り、人生に味を持たせるのです。

アクセサリーの意味

身につけるアクセサリーに、意味を込めている人は多いと思うのですが、私は、「苦しみを吸い取ってくれる」また、「心を浄化してくれる」などの意味をよく込めています。新しいものを買うこともしているのですが、私にはずっと捨てられない指輪があります。その指輪は、私の苦しみも喜びも、長い年月の中で吸い込んでくれていると思うのですが、より、「苦しみ」の意味が強いのです。最初は、一人で強く生きられるようにという、願いを込めてつけていました。そのうち、指輪が外れてしまうという心配から、カバンの中にしまい込むようになりました。実は、この指輪は、カントの哲学書の中の言葉から、名前をつけてあるのです。それが、「躓きの石」です。

躓きの石

「躓きの石」は、文字どおり、躓いてしまう、邪魔な石です。カントはその言葉を、主に「実践理性批判」という、道徳について哲学した著書で使っているのですが、それは、自由のことを言っているのです。自由というものの本当の難しさを、「躓きの石」と言って表しているのです。簡単に言ってしまうと、自我が邪魔をして自由の意味が濁ってしまうということを行っています。

私が、この「躓きの石の指輪」を持ち続けていくと、最初のところ、カントの言ったとおりのことが起きていきました。何というか、苦しみと自我が肥大化していくのです。そして、自由という、本当は美しいはずの世界が、濁っていくのです。

指輪の変身

ただの物体である指輪に、そんな力があるわけではないと思われるかもしれませんが。しかし、私は確かに躓きの石の指輪に、主に苦しみの経験を吸わせるという、感覚を持っていたのです。その念が、私の精神に影響を与えていたと言え、なんとなく伝わるのでしょうか。

私は、だんだん躓きの石の指輪がいやになってきました。そして、何度も捨てようとしてきました。しかし、私はそれを捨てられませんでした。すると、そのうち、その指輪は物体ではなく、概念なのだという感覚がおとずれました。そして、その指輪は私の哲学の宝となったのです。

私は、そのとき、気がついたのです。古い物を大切に続ける意味について。

このことについて、カントの哲学をもとに分析してみます。

カテゴリー

カントの哲学は、観念論と言われ、精神の大切さを中心に書いています。

その中で、カントは物質的な世界の濁りを浄めるようなことを、純粋理性批判でしているのです。純粋理性批判は、認識について分析することから始まり、世界の果てや、神の存在の有無について分析する内容へと、広がっていきます。

この著書の中心部分に、「カテゴリー」（純粋悟性概念）というものについての分析が出てきます。カテゴリーとは、悟性（知性）のよる、「人間の思考」が成立するときに、頭の中で機能する、思考の分類の枠組みです。人は、頭の中で、自分の考えを、カテゴリーによって分類しているのです。

このカテゴリーが、私の指輪の物質的な濁りを浄めたのではないかと思ったのです。

物と概念

私は、最初、指輪を物体としか思っていませんでした。その状態は、カントの純粋理性批判の最初の方の、認識が始まる初期の段階です。人間の認識は、まず、感性で、ものを受け止めることから始まると、カントは書いていますが、そのときはまだ、物体は「もの」として心の中に認識されているのみです。

これが、いつ概念となるのか？ただの「もの」は、いつのまにか、心の中で、「概念」になるのです。このとき、「もの」は、力を持つのです。

この瞬間が、感性で受け止めた、「もの」を、悟性（知性）で考え、カテゴリーの中に分類するときだと思われます。

感性で受け止めただけの「もの」は、悟性によって、「考えたもの」になるのです。

私の指輪は、最初、「自由」や、「自由な思考」をせき止めるだけの、邪魔な石でした。それは、指輪が「もの」でしかなかったときです。

それが、ずっと持ち続けるうちに、カテゴリーの中に分類されて、思考が成立し、概念となったのです。そのとき、指輪は本当の価値を持ったのです。

苦しみが宝にかわる瞬間

私は、カテゴリーの中に、思考したことが分類される時、「もの」の中に入っていた、執着の鎖が解かれ、その毒がぬかれるのだと思います。

私の指輪は、やはり苦しみの指輪かもしれません。しかし、いつしか概念にかわり、「もの」としての執着の毒をぬかれたとき、「躓きの石」という、哲学の宝にかわっていたのです。

どうして躓きの石が宝であるか

どうして躓きの石が哲学の宝であるかは、「心で読むカント哲学」に詳しく書きましたが、簡単に書いておきます。

カントは、自由の難しさをよく知っていて、それが簡単に成立しないことを書くために、純粹理性批判の次の実践理性批判で、厳しい道徳を書きました。その、自由の難しさを「躓きの石」と言っているのですが、もし、自由が簡単に成立してしまえば、この世界には苦しみが全くなくなります。何をしても自由なのなら、心の中で、「これは悪いことなのだからやめたい。でも、やめることがつらい。」と葛藤する必要がありません。それは楽なことなのかもしれませんが、そうなっては、犯罪を防ぐことができなくなり、それを防止するには、心の美しい人しか存在できないことになります。それだけではなく、「悩む」という、人間的な営みもなくなります。何しろ、何をしても自由なのですから・・・。

しかし、自由は、立派な人が、心の中で自分を律して行使すると、世界でいちばん素晴らしいものとなります。自由は、「悩む、苦しむ」という、人間の営みによって成り立っていくから素晴らしいのです。

「躓きの石」という言葉は、自由を素晴らしいものにみがいていくために、マイナスを帯びた言葉としてカントに表現されているのです。

躓きの石の指輪

私の、躓きの石の指輪は、カントの哲学と出会うことによって、哲学の、そして人生の宝になりました。

古いものは、長く大切にしているうちに、心を吸収し、概念となります。そして、大切なお守りになるのです。

カントの純粋理性批判において、その、美しい変身が書かれていると考えてみると、純粋理性批判はとても味わい深いものになったのです。

私の指輪は、その名前のおり、私の躓きの石です。苦しいことをたくさん吸って、ときどき重たく感じたりして、ついつい新しいものを買ってしまったりします。しかし、そんなとき、カントにとっても、躓きの石は、哲学の宝であったと考えてみるのです。自由が難しく、悩み続けなければならないから、カントも哲学をしたのではないかと……。躓きの石は、悩みの種でありながら、自由を美しくみがくための、宝石の原石にちがいないのです。

カントは純粋理性批判で、物の世界の執着を解きほぐしたかもしれません。しかし、実践理性批判で自由の難しさを書くことでも、この世界の毒をぬいてくれているような気がします。しかし、苦しみや、毒は、ぬいてもぬいてもわいてくる……。だから、カントは哲学を続けたのではないのでしょうか。それは、もしかしたら楽しいデトックスであったのかもしれません。